



田面きらめく季すぎて

毎年、田植えの季節になると必ず思い出す一首がある。

ねむごろにふたあしみあしふみ入りて浮き早苗さす妹が姿や
アララギ派歌人の古泉千樫(こいずみちかし)の歌である。一苗たりとも無駄にしないよう、静かに静かに田に入り、浮いた苗を丁寧に挿してゆく早乙女の姿。人の力でもって田植えをしていた頃の光景が想像される。

今年も稲は元気に育っている。射しこむ光にきらめいていた田面(たづら)が、苗の成長につれていつのまにか水面が見えなくなってきた。若苗は日毎に背丈を伸ばし、色を深めている。日光市となって2年が経つが、水稻耕作地帯は旧今市市の大谷川扇状地に集中している。ただ、残念なことに休耕田が目につくことも事実だ。新年早々のギョウザ事件を発端に、人々の国産農産物に対する関心がとても深くなってきているのを私たちは数々のニュースで知らされている。安心・安全な農産物供給地として、今市地区の休耕田がさまざまな知恵と工夫で復活され、多くの人々に認識・消費される時代がやってくることを願っている一人だ。

日本の文化が米づくりと共に発展して来たことは多くの人が説いていることだが、それを象徴的に今も伝えているのが各地に残されている祭りである。ここに一冊の本がある。『とっておきの里祭り』— 著者の岡村直樹氏は長年にわたり日本の一級河川を自分の目と足で確かめてきた人。大谷川や大芦川も調査されており、水郷水都全国大会で何回かお会いしている。取材が七年に及んだこの本は米作りにまつわるさまざまな祭りを取り上げている。例えば最初に登場する日光輪王寺の強飯式は「食生活を映す行事の一つ〈日光責め〉」、高知市のどろんこ祭りは「泥を塗って逆襲に転ずる早乙女たち」、島根県太田市の御田植祭は「菖蒲を水口に挿し虫除け」、兵庫県三田市の雨乞いの百石踊りは「慈雨への願い一途に」、石川県奥能登のアエノコトは「田の神様を招いて歓待」などなど。岡村氏は、人々が米を得るためにどれほどの努力を続けてきたかを各地のさまざまな祭りを通して私達に静かに語りかけてくれる。紹介された33の祭りは全国的に見ればほんの一部だろうが、これだけの祭りが今も残っているということは、豊作を望むために神々のもっとも喜ぶことを見つけ、奇祭珍祭を行ってきた人々の強い願いをあらわしているのだろう。日本人のこの発想の豊かさは、現代ではむしろ新鮮に映るというものだ。

観光客を呼び込むために粉飾された祭りではなく、そこに住む人々が祈りをこめた素朴な祭り。今市にもまだまだ残っていると思う。外に出よう。そして声を交わし、祭りに参加させてもらおう。畏怖と感謝を忘れぬ心の復活を望みたい。人と人がもっとやさしくなるために。そんなことを発想させてくれた一冊だ。

今、日本は食べ物のとても豊かな国になった。それは輸入食品の恩恵に浴することが多いのだが、もう一度自分の住む地域に伝わる食べ物を見直すべきではないだろうか。世界中探しても、これほど水と緑に恵まれた国は見つからないと思っている。そこには人々が長い年月をかけて作り上げてきた多くの努力の跡が残されており、叶わぬ自然現象には祈りをもって対処してきた風土がある。将来予測される食糧危機を乗り越えるヒントがこの国にはまだたくさん残されているのではないだろうか。自給率100パーセントである米を世界に売り込むこと、田植えボランティア・稲刈りボランティアの活動、生き物と人間が共存共栄できる里山を守ることは安心安全な食糧をつくることにつながっていく。今市の水と緑は大きな宝物を秘めている。(塚崎)

目次:

田園きらめく季 すぎて	1
山ウド	2
蛙の鳴き声を 聞いてみよう	2
水の会近況	3
川むしたんけん隊	3
「水の会」結成の頃	4

お知らせ

小代地区の生き物 連続講座

第4回(最終回)
シモツケコウホネってなに?

8月30日(土)
午前9時~12時
落合公民館(お話)
コウホネ自生地(観察会)
講師:星直斗さん
栃木県立博物館学芸部主任



山ウド



太い山ウドの根元にナイフを当て、ザクッと切り取る。その場で皮をおき、少しかじれば、ほのかな甘みが口いっぱい広がる。山ウドは、サラダ、ぬた、油炒め、キンピラなど、アク抜きなしで簡単に楽しめる山菜だ。とくに、若菜の天ぷらはサクツとしてウマイ。タラの芽やコシアブラばかりが人気になっているが、山ウドの若菜の天ぷらは、知る人ぞ知る！？だ。何より、タラの芽のように先を競って取らなくてもいいのがグーだ。一度おためしあれ。

けっこう長い間楽しめる山菜なので、目に付いたら新芽の部分を少しばかりポケットに。揚げたての自然の香りがする天ぷらは心をシアワセにする。(隅)

主をさがして五感発動！

コロコロ、コロコロ……、
ウググー、ウググー……、
グエー、グエー……。

皆さんはこの声の主の姿を思い浮かべることができますか？

青葉をまとった林のそばの田んぼで三分間、目を閉じて静かに耳を澄ませてみました。にぎやかに走り回っていた子供達もじっと聞き入っています。と、しばらくして、待っていた声の主が、少しずつ声を出し始めたようです。

圃場整備が計画されている小代地区の5月25日夕刻、日光市農林課の主催で行われた「生きもの講座—蛙の鳴き声を聞いてみよう—」には幼稚園生から大人まで30数名近くが参加、落合公民館で講義を受けた後、外に出たの観察会となりました。講師の県立博物館主任研究員・林 光武先生によると今回、三種類の蛙が鳴いていたということでした。

この日、子供達は休耕田でアカハライモリをつかまえたり、水張田に浮いているシュレーゲルアオガエルの卵塊から小さなクリーム色のオタマジャクシを見つけたりして大興奮状態。シュレーゲルアオガエルは春先、柔らかい土の中に卵を産むため、田んぼに水が入るとふわふわと浮き上がってくるということ初めて知り、子供達が夢中になっている姿に大人達も大きな元気をもらいました。こういう体験を多くの子供達にもっともっと増やしてあげたいものです。そして、生き物が

少しでも生き延びるためのやさしさを残した、生態系の保護を思いやった整備事業であって欲しいと思いました。

「匂いをかいでください！」と林先生が参加者全員の鼻先に差し出したのはアカハライモリ。赤錆のようなにおいは、遠い昔にかいたことがあるなつかしいものでした。イモリは親になるまで3年かかるそうです。彼らとこの先また会えるのでしょうか。夕影迫る木の下にはカザグルマが大きな白い花を咲かせていました。圃場整備の工法が、彼らを絶滅の方向に進ませるものでないことを祈っています。(塚崎)

答え

コロコロ…… シュレーゲルアオガエル
ウググー…… トウキョウダルマガエル
グエー…… ニホンアマガエル

下野新聞
2008/05/29
県北版より転載



田んぼでカエルの観察を行う参加者

【日光】小代のほ場 整備の在り方を検討する「小代地区環境配慮準備検討会」主催の生き物連続講座が二十四日開講し、第一回として、幅広い交流も行うことが目的。約三十人が落合公民館で県立博物館の林光武主任研究員の講義を聴いた後、地区内の田んぼでカエルを観察した。小雨模様の中、参加者はあせ道を歩きながらカエルを探し、子どもたちは「あ、いたいた」と、姿を見つけたたびに大はしゃぎ。水の中には卵も見つかった。講座は今後、ホタルやシモツケコウホネなどをテーマに、八月まで計三回開かれる。

会員みなさまへ 水の会・近況

すっかり御無沙汰が続いてしまいました。皆様お変わりありませんでしょうか？ 5月に久方ぶりの事務局会議を開き、今後のことを話し合いました。この中では、少しずつでも活動を再開していければ……と言う、積極的な意見が大勢をしめました。と言っても、あまり大上段に振りかぶったものではなく、「少しずつ楽しみながら」をモットーに始めていこうと、言うことでした。そんなわけで、まず通信を再開いたします。急がず活動を模索していきたいと考えています。

もともと当会は国による思川開発計画の一環としての今市からの導水事業に反対して活動してきました。それが中止されたいま、思川開発事業そのものへの反対が根本に残っていることはもちろんですが、それを除けば取り立てて緊急な課題を抱えているわけではありません。

しかし『今市の水を守る』と言うことは前述の課題だけに限定しなくても良いわけで、古い皮袋に新しい「水(?)」を入れることも考えられます。しばらくは試行錯誤が続くかもしれませんが、とりあえず年2回程度の発行を考えています。皆様からの投稿も歓迎します。

内容は中心スタッフの関心も多岐にわたってきていますので、当面、各人の近況報告のようなものになりそうですが、ご容赦ください。尚、当会の元代表の福田健彦さんは御子息のお住まいの近くの千葉県の施設に6月初旬、移住されました。奥様のご病気とのことですが、ご本人はまだまだかくしゃくとしてお元気です。ご一緒のお部屋で生活をなされていることで、奥様もことのほかお喜びになっているとのこと、事務局にもお便りをいただきました。御住所等、お知りになりたい方は事務局・森までご連絡ください。(森)

「川むしたんけん隊」

昨年5月26日(主催:NPO法人なんとなくのにわ)、7月29日(主催:NPO法人和音)の「川むしたんけん隊」に協力しました。会場は、明神駅近くの行川、猪倉の田川でした。5月は気温27度、水温19度、快晴。ヒゲナガカワトビケラ、モンカゲロウなど、きれいな水にすむ水生昆虫がたくさん見られました。ドジョウ、カジカ、ハヤなど魚も豊富で、カジカガエルの声を聴いたり、オタマジャクシを捕まえたり、行川は生物相の豊かな川だということをあらためて知りました。(右写真)

本年も5月24日(土)に企画しましたが、荒天のため中止になってしまいました。昨年と同じ時期なのに、気温、水温とも12度前後で、子どもたちには無理な状況でした。当日、午前10時の開始予定時刻に集まった本会メンバーが、雨の中、ミニ調査会を行いました。下の写真は当日の行川の様子です。数日前から雨の日が続いたので、だいぶ増水していました。それでも、昨年見た生き物を多数見つけることができました。次の「たんけん隊」はよい天気にも恵まれますように。



まだら模様を持つシマドジョウ



網ですくい取ったヤマメ



「水の会」結成の頃

大谷川取水中止から8年、
「だいや川通信」第11号(2002年9月)の記事より

本会の前身は思川開発事業計画による大谷川取水問題を検討しようと1994年6月、市役所OBの福田健彦氏を中心に設立された「今市の水を考える会」です。思川開発事業計画とは首都圏の水不足を補うため、大谷川の水を鹿沼市の南摩地区に送ってそこにダムを作るというものです。1964年に事業構想が発表されましたが、今市市では翌年から市を挙げての大きな反対運動に展開していきました。1994年春、当初計画から取水量の変更があり、その説明会に市役所OBのメンバーが公団に対して質問を行ったのが「今市の水を考える会」誕生のきっかけとなりました。

以来、「考える会」では毎月定例会を持ってさまざまな角度から大谷川取水の問題点を調査検討、また思川開発事業に反対する多くの団体と連携して講演会や現地調査を重ねてきました。2000年4月、今市市の報告書「思川開発事業大谷川取水に対する調査報告書」完成を機に、環境問題に関心をもつ個人やグループが合流して、大谷川からの取水に対する反対運動を広く市民に進めようと新しく「今市の水を守る市民の会」が発足しました。福田健彦代表の膨大な資料と豊富な知識は福田昭夫市長(当時)との懇談会や反対署名運動に反映され、また新しく加わったたくさんの会員の精力的な活動があって、2000年11月、大谷川取水は正式に中止となりました。

2000年の活動記録

●4月:今市の水を守る市民の会、誕生 ●5月:第1回「川むしたんけん隊」(「かたくりの湯」前の大谷川にて) ●7月:シール作成および署名運動について記者発表:東大芦川ダム反対・立木トラスト札掛け参加:ジャスコ今市店において署名活動・シール販売 ●8月:福田今市市長との意見交換会(市外署名簿提出・2060人分):市民の会取り扱い分の反対期成同盟署名簿を期成同盟へ提出 ●9月:福田今市市長に署名残り分提出(総計5102名):今市市長立候補予定者宅に当会アンケート実施 ●11月:東大芦川ダム・立木トラスト札掛け行事に参加:「流域の会」発足3周年記念市民集会「ダムは必要か?」に参加:建設省(当時)、大谷川取水の中止と思川開発の継続を表明

郵便振替口座

00140-4-535550

連絡先

〒321-1102 日光市板橋1732-1 森方

今市の水を守る市民の会

0288-27-2183 (8時~17時:森)

0288-26-3324 (17時~21時:塚崎)

<http://www.somesing.net/daiyagawa/>

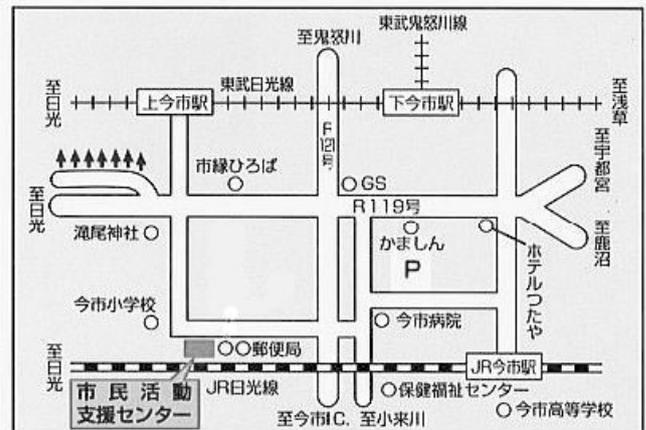
【訃報】

本通信題字、大芦川CD題字など、本会に力強い文字を提供して下さった福田稔さんが本年2月、76歳で逝去されました。福田さんはナイフ制作者、画家、書家として幅広く活躍されました。本会への多大な応援に感謝し、つつしんで、ご冥福をお祈りします。

次回の定例会

8月27日(水)午後1時~2時

日光市民活動支援センター



編集後記

40年近く前のことです。入学した大学のそばに原子力発電所の建設予定地あり、大学の壁に反対ビラがたくさん貼ってありました。地質鉱物学科の先輩から「あの辺の地下は岩盤で、しっかりしているように見えるけれど、岩盤の間にもろい地層があって、地滑りが起こる」と聞きました。電力会社の担当者にそれを問いつめたら、「地滑りが起きても、格納容器ごと海に落ちるから安全だ」と言ったとか ●建設差し止め裁判を傍聴したり、本を読んだり、自分なりに考えてみると、どうも日本で原発をあちこち作るのは無理があるのではという気持ちになりました。そのとき問題になっていたのは柏崎刈羽原子力発電所でしたが、もっと近くの巻町(いまは新潟市に合併)にも計画が持ち上がっていました。大学の地質専門家は危ないと言っていました。どんな所だろうと、予定地を見に行ったことがありました。海岸近くの崖のような土地で、政治家の利権で、その場所に落ち着いたとかいう噂もありました。その巻原子力発電所は2004年に設置許可申請取り下げ、建設中止となっています。もし、建設され、稼働していたらどうなっていたのでしょうか ●原発地下の断層や地滑りの話は、あまりマスコミに登場しません。企業や政治家の利権が大きなプロジェクトを推進し、都合の悪い科学的分析は隠されてしまう。停止している柏崎刈羽原子力発電所のテレビCMを見るたび、そんなことを思い出します。(T)